別記様式第４号

# 平成 30 年度 独創的研究助成費 実績報告書

平成　31 年　2 月　28 日

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 報　告　者 | 学科名 | デザイン工学科 | 職 名 | 教授 | 氏 名 | 岩　本　弘　光 |
| 研 究 課 題 | スリランカの伝統的メダ・ミドューラ建築に関する研究　2<br>（スリランカ国立モラトワ大学建築学部との共同研究） | | | | | |
| 研 究 組 織 | 氏　名 | | 所 属 ・ 職 | 専 門 分 野 | 役　割　分　担 | |
| | 代表 | 岩本弘光 | デザイン学部・教授 | | | |
| | 分担者 | | | | | |

**研究実績の概要**

□　学術的背景、国内外の動向と位置づけ

本研究は平成29年度本学独創的研究の継続研究である。また、スリランカ国立モラトワ大学建築学部との共同研究を開始する。国内外におけるスリランカのメダ・ミドゥーラ建築（meda midura,シンハラ語：中庭建築）に関する研究は体系化されておらず、基礎研究の進展が望まれている。これまで申請者は、スリランカ人建築家ジェフリー・バワの研究「解読 ジェフリー・バワの建築、彰国社、2016年」の刊行や、「日本建築学会機関誌、建築雑誌2017年2月号、アジア建築家山脈スリランカ編」の寄稿により、国内のスリランカ近現代建築研究に貢献してきた。こうした研究成果を通じて、スリランカにおける近現代建築の伝統的固有性が「メダ・ミドゥーラ建築」にあることの知見を得ている。

□　メダ・ミドゥーラ建築の伝播と発展

スリランカにおける「メダ・ミドゥーラ建築」の文献上の初出は、17 世紀半ばにセイロンで幽閉生活をおくった R･ノックスによる『セイロン島誌』であり、その後、18 世紀半ばに島を訪れた J･W･ハイト、19 初頭キャンディ王朝に訪島した J･デヴィの報告に続く。いづれも、貧しい人々は 1 部屋か 2 部屋の家に対して、貴顕な人々がコートヤード・ハウス（メダ・ミドゥーラ建築）に居住していたと記述している。考古学者、建築家 V･ボスによるヒアリング調査を実施して、古都アヌラーダプラの現場調査を通じて、シンハラ人が住む島中央部では、外敵や象など大型野獣から住環境を守るために、自然発生的にメダ･ミドゥーラ建築が形成された、と主張する新たな資料と知見を得た。メダ･ミドゥーラの出自特定は記述不足で困難、特に南アジアやムスリムの影響が大きいとする、建築家 I･ラヒームの主張を考え合わせると、異なる民族や宗教が個別にメダ･ミドゥーラ建築を島に持ち込んで発展した可能性がある。今回調査地区北部のジャフナではメダ･ミドゥーラ建築に必ず井戸が併設されて生活水を確保しているのが特徴。

※ 次ページに続く

| | |
|---|---|
| 研究実績の概要 | □　現地調査<br>Ⅰ.南インドから移住したヒンドゥ教徒やムスリムが多く居住する北部ジャフナにて、ロ型、L型、平行型のメダ･ミドゥーラ住宅を中心に調査した。<br>1.シルバリンガ邸（Silvalingam house）　2.ダッチ邸（Dutch house）<br>3.ヴァドコッタイの家（house at Vaddukoddai）<br>4.モーライの家（House at Moolai）<br>5.ポルトガル教会（Portuguese Church）<br>6.シンスプラムの家（House at Sinthupuram）<br> <br>1<br> <br>2<br> <br>3<br> <br>4<br> <br>5<br> <br>6<br>Ⅱ.北インド、ラジャスラン州のジョードプル、ジャイプールにて、ラージプート族の城塞建築を構成するメダ･ミドゥーラ群を調査した。<br>7.メヘランガール城塞（Mehrangarh Fort）<br>8.アンベール城塞(Amber Fort)<br> <br>7<br> <br>8 |
| 成果資料目録 | 2018 年度日本建築学会大会にて「スリランカ新国会議事堂の設計過程に関する研究」を発表した。 |